

## 「はぐ手を結ぶ、解くそのときまで」

作業用手袋の軍手は日常の中に潜みます。

花壇の土いじりやゴミ捨て場、工事現場、あるいはここ東京造形大学の構内など、作業現場に落ちているのとは別に道端に所在のない手袋が不意に現れてきます。  
無作為であつたり誰かに拾われて作為によって形を変えられたり左右の一双が揃わず、存在しています。

それらの持ち主は、例えば輸送トラックの運転手や実際にこの街の中で新しい建物を建てたり、またはメンテナンスをしたりと都市を形成し変わるための工事をしている人々かもしれません。

大量生産品でいくらかでも替えの効く軍手は、都市生活の作り変わることを象徴しうる存在。  
脈略なくないように不意に現れて、我々に軍手は何かを形づくる人間の存在。  
つまり、構造の尻尾を見せているのだと考えています。

日常の中に現れる不意な存在が、近づいてみると編み地が見えて一本の糸の複雑な絡まりによってできていることが想像されながらも変形していく。

軍手は布という意味では画布と同じ物質ではありますが、手袋の形にするメリヤス編みの編み物で、織物の画布とは少し異なり、編まれたものは解くことで一本の糸に戻り、再び編まれたり縫うための色彩のひとつになり得る可逆性をもっています。  
また、ハンドサインなどの手の形からもたらす意味性が強く、用途や左右の概念をもつ具象性の高い日用品です。

そういった形をもった布に手作業の加工をすることで、日常の中にあるものとはまったく別のイメージに変質することが可能になると考えています。

■

「脱ぐ／着る」ときに衣服によって身体の動きが制限されたり、衣服の糸が解れたりビリッとちぎれる瞬間があります。

そういったときに衣服は「脱がれる／着られる」ということよりも、布という存在として身体との関係がつくられるのではないかと考えます。

自身の身体に設えたものだったはずの衣服が、実は衣服が許容する範囲の手綱を握っているかもしれません。  
布を支えるための身体が毎日繰り返される行為の中で関係作られているように感じるのです。

衣服のカーテンの裾を持ち上げて入ってみてください。